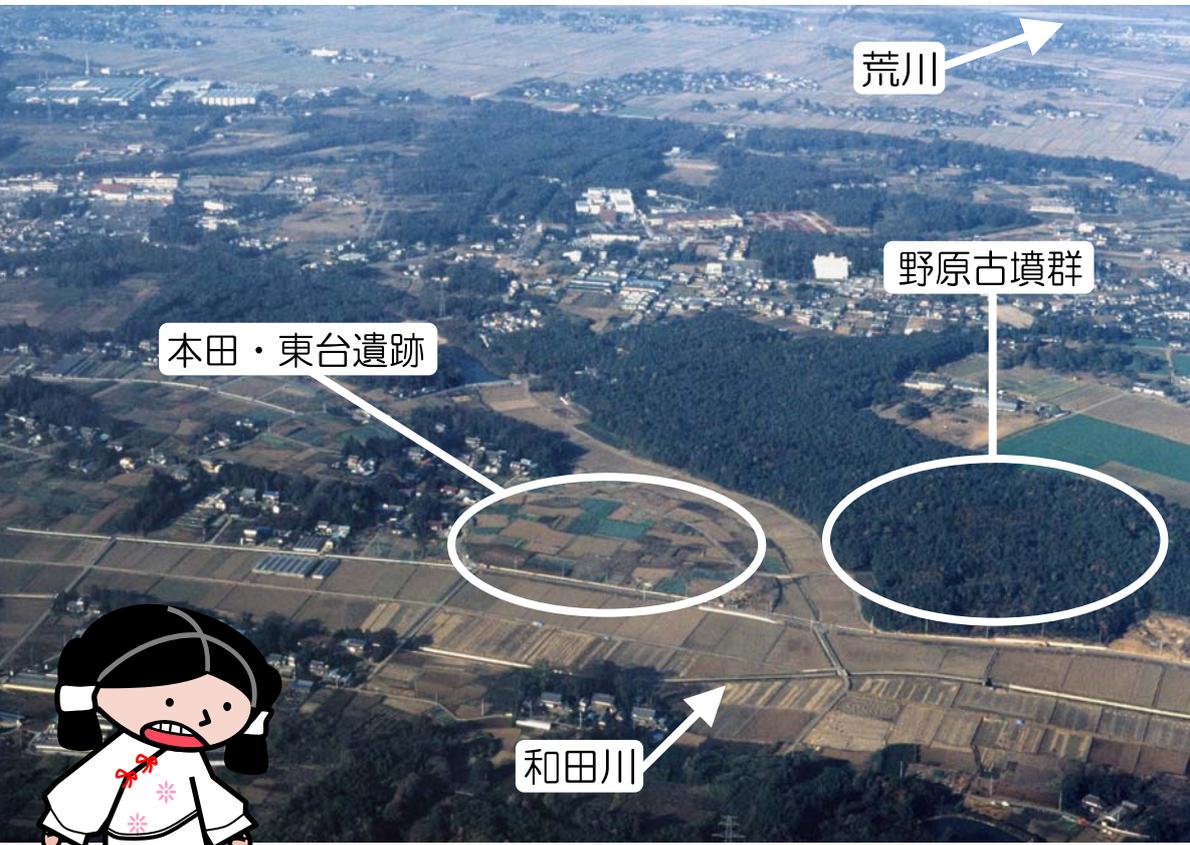


わがまち遺跡展

―本田・東台遺跡―



遺跡の概要

本田・東台遺跡は、和田川に南面する江南台地にある集落跡です。過去3回の発掘調査により遺跡の約2割を確認した結果、約八〇軒の竪穴式住居跡が見つかり、古墳時代中頃（六世紀）を中心にムラが発展したことがわかりました。一辺8mを超す大型の住居跡や小鍛冶跡からは、鉄製品や祭祀具とともにたくさんの土器が出土しています。遺跡の東側には「踊る埴輪」が出土した野原古墳群が分布し、両者は一体の遺跡で和田川流域の指導者のいたムラと考えることができます。

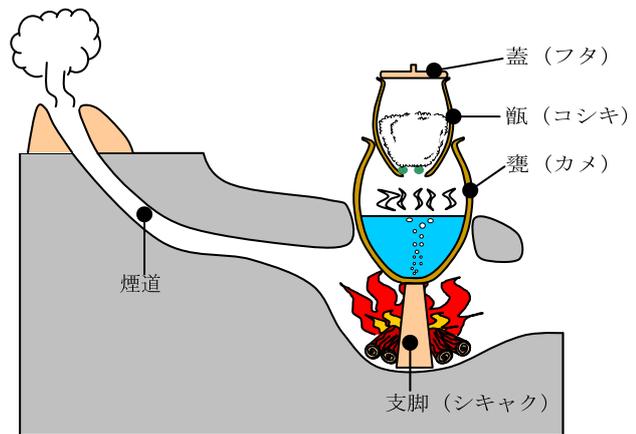
今回の展示では、遺跡から出土した各種の遺物を手がかりに、当時の人々の生活やムラの様子を解説します。



カマドの発掘状況

カマドのはじまり

弥生時代から古墳時代には、人々が生活する上で大きな変化がありました。それは住居の一部にカマドが作られたことです。カマドはそれまでの囲炉裏に比べると、熱効率が高く、少ない燃料でも十分な火力が得られるようになりました。また、住居の中央に位置した囲炉裏に比べ、カマドは壁際に配置されたため、起居が容易になったことが何われまます。カマドはもっぱら炊事に使われることから、安定した食生活が維持できたことを示し、古墳時代のこととされる仁徳天皇の事跡に、家々のカマドから立ち上る煙をみて治世の安定を確認したと伝えられています。（民衆は飢えることなく食事のためにカマドを焚いていると判断したという故事「日本書紀」）



カマドの構造図（側面）

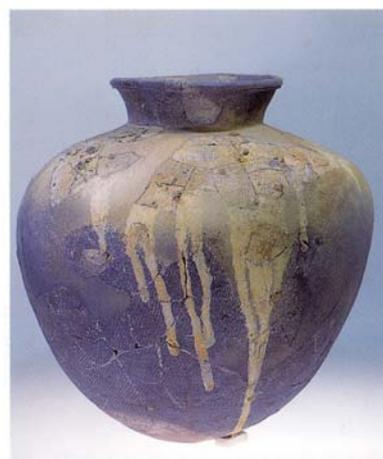


まつりの道具・生産の道具

本田・東台遺跡からは、土師器や須恵器で作られた盛り付用の「高杯（たかつき）」、「杯（つき）」、酒などを注いだ「はそう」や酒などを入れた大きな甕、瓶が出土しています。また、貴重品であるガラス製の管玉のほかに、手づくね土器（手びねりの土器）、白玉（滑石製）、土玉など製作が簡単な品が出土しています。このほかに、刀形や櫛形など模形（形代）もあつたようですが、植物質の材質であつたらしく出土することは稀です。

これらの道具はまつりに使われたものと考えられ、まつりの内容は、神や祖先を対象としたもの、自然や生産の安定・豊穰を祈つたもの、人の一生に関わる儀礼など様々であつたようです。

また、古墳時代には、貴重な資源である鉄が、大刀や鎌などの武器だけでなく、鎌や鍬などの農具や、斧や火打ちがねなどの日常的な道具の素材としても使われたようです。ムラでも簡単な加工やものづくりを行っていたようで、羽口（炉に空気を送るための筒状の送風道具）などの鍛冶道具や鉄くずなどが出土しています。また、糸をつむぐための道具である紡錘車は、石や土で作られ、麻やカラムシなどの繊維を撚って糸をつくつたと考えられます。



須恵器甕

大量生産大量使用

古墳時代は、米作りが一応の安定をみた時代で、個人用の食器が多く見られるようになります。日常的には、土師器と呼ぶ素焼きの土器が盛り付け用の器や煮炊き用の甕・甑に多く使われました。この時代のムラの発掘では、これらの焼けた土器片が大量に出土します。貯蔵用には、土師器とともに当時大陸から渡来した新しい技術で焼かれた須恵器も広まっていました。須恵器は、耐水性に優れた高級品で、古墳などに供えられて出土することも多く、使われ方に区別があつたようです。展示品の須恵器は、東海地方で生産されたものと考えられます。また、土師器には、須恵器の形をまねたもの（須恵器模倣杯）もあります。



羽口

